

# 赤沢左俣

一九八三年六月一八日

一三時〇〇分、ワラジをつけて遡行開始する。すぐに砂防ダムが出てきた。沢登りをやっていて興をそがれるだけでなく、乗り越すにもやっ

かいなのがこのての人工の建造物である。ホールド、スタンスとなるようなものはまずないし、たいていは高捲く破目となる。ここでも左岸を捲いて上へ出た。

この先はずっとナメになる。水量は少ないが、サンシヨウウオがいるところをみると濁れることはない流れのようだ。一三時二〇分、左俣出合。今日の目標はこの沢だ。

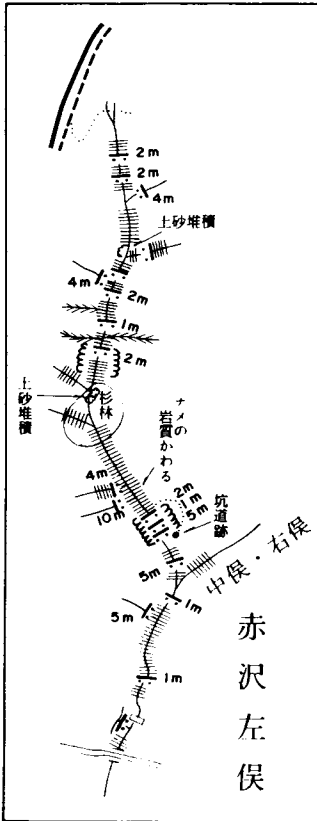
まずは出合すくの五ヶ滝を直登す

る。ホールドは結構あるのだが、一番上にてシャワーとなり、おまけにコケですべるのには参った。

その先すぐにまた五ヶの滝。左岸に試し堀をしたのではないかと思われる高さ一ヶ程の坑道が口をあけている。直登できるかとも思ったが、

今日は一人なので何となく不安となり左岸を捲く。  
この上はナメが続く。しかし今までの礫を固めたような岩(集塊岩)から、細かい砂粒を固めたような感じの岩へと岩質が変化した。どうとう滝もかからないので、どんどん先へと進む。

一四時二〇分、兩岸は松のまだ若い造林地(一九七九年植樹)となり、沢はヤブの中の細い流れとなつているのを見て、右岸の尾根を目指す。



尾根上にははっきりした踏跡があり、岩振部落へと続いていた。

(記・)

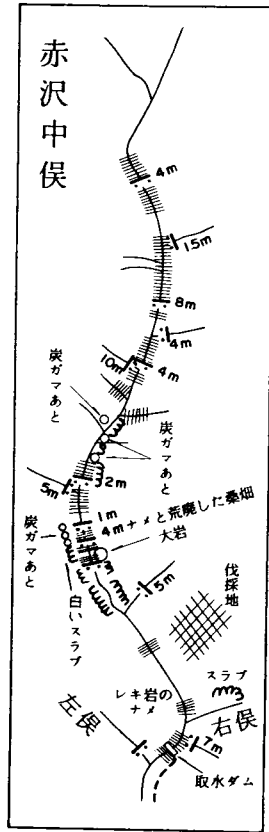
「タイム」 赤沢出合(一三:〇〇)↓  
左俣出合(二三:二〇)↓遊行終了(二四:二〇)

## 赤沢中俣(金山沢)

一九八二年五月二三日

大深谷沢の遊行を終え、尾根上で二〇分程小休止してから、赤沢の下降にかかる。一〇分程下って本流へ。この沢もナメが多いようだ。やがて四郎の滝。右岸に足形があつて、この沢にもいろんな往来があつたとをしのぼせる。

八郎の滝は左岸を捲く。ナメと滝



霧囲気が良くなってきた。しかし滝はかからず、すぐまた平凡となつてしまった。

一三時三〇分、取水ダムに着く。

ここで沢から上がり、水路ぞいの踏跡をたどって岩振部落へ出る。

(記・)

「タイム」 下降開始(一一:二五)↓  
取水ダム(一三:三〇)↓岩振(一三:五〇)

で、今のところ霧囲気は上々である。期待しながら下っていたら、沢がいつぱんに平凡になってしまった。もうあまり期待ももてそうにないの、両岸にかすかに残る踏跡を適当に使いながら下る。この沢ぞいにも炭焼き釜跡が多い。桑畑跡もあった。

一三時一〇分、両岸が迫り、急に